
蚩影

紅玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

董影

【Zコード】

N7070A

【作者名】

紅玉

【あらすじ】

主人公は、荒廃した世界で一人で生きてきた。信頼する仲間などいない。生きるためなら何でもやる。そんな彼が彼女と出会い、少しづつ何かが変わり始めた。

プロローグ（前書き）

短編だったものをアドバイスにより、見易くするために連載にしました。

項目ごとに分けただけなので、内容に大きな変更はありません。
この作品が少しでも、読まれた方の胸に足跡が残せればと願っています。

プロローグ

闇は僕を覆い隠していた。僕は息を潜め、闇へと溶け込む。まるで、その一部かのように。

『『独りじゃないよ』』

闇の中に、僅かな光が見えた。

小さな光なのに、それは僕にはとても眩しかった。眩し過ぎた。だから、君が恐かった。

だから、君の光が消えてしまったことにも気付けなかった。僕は、何も変わらなかつた。変われなかつた。

今さらながら、闇の中から這い出そうともがく。だけど君がいない今、僕にその力はない。

僕は、君を知つて、光の温かさを知つてしまつた。

君がいけないんだ。僕に手を差し伸べた君が。この気持ちを何処に置けばいい？

捨てようとしても、溢れ出てくる君への想い。教えてくれ。ほたる…

第1話 謎の女

ほたるに初めて会ったのは、夕暮れ時。朱く染まつた空を暗闇が追い立てていた。太陽に変わつて月は白く光りを放ち出し、暗闇の指針となる。だが、五月蠅いネオンの街に、月の明かりは届かない。欲望の渦巻く人間の小さな世界を作つた街。月は黙つて、そんな街を冷たい瞳で見下ろしていた。

僕はいつも通りその街を抜け、明かりのない、悪臭が鼻につく薄汚れた通りへと歩いていく。

ゴミ袋を猫と一緒に漁る浮浪者。ぼろ布をただ纏つただけの孤児。眼の見えない少女。ここは、華やかな街とは裏腹な世界だった。僕もこの世界の住人だ。

「ねえ、待つて」

突然、声をかけられた。立ち止まり、振り向いた。通り過ぎた路地から、一人の女が出て來た。

亜麻色の髪に、黒い瞳。その瞳は、不思議な、人を引き付けるような力を持つた瞳だった。

女は僕を見て、にっこりと笑つた。薄暗い道に、ぱつと光りが灯つた。僕はその光におののいた。近づいてはいけないと、直感的に感じた。

「あなたをずっと捜してたの」

でも、彼女から逃れようと思つても体が石のように動かない。彼女の瞳のせいだとその時思った。

「…待つてたつて？」

自然と口から言葉が零れ落ちた。自分の言葉なのに、自分以外の誰かが発したような錯覚を起こしていた。彼女は、何者なんだ？

「あなたに御礼がしたいと思ってたの」
ほのかに赤い唇が、笑みを零しながら動く。

彼女の存在は、僕にとって恐怖だった。彼女から柔らかな光の粒が

溢れ出し、この世界を照らし出す。僕の居場所が無くなる…。

「僕は君を知らない」

僕の表情は固く、月の明かりで普段よりも冷たさを増していた。

第2話 御礼

「あなたが覚えていなくても、私はあなたを覚えている。そんなに身構えないで。私はただ、あなたに御礼がしたいだけだから」

「礼なんてどうだつていい。僕は君知らないし、誰かに礼をしてもらひう事もやつた事はない。恨みを買つ事はたくさんしてきたけどね」

僕は、向きを変えようと右足を後ろに僅かに引いた。

「あ…っ。逃げないでお願い、御礼をさせて」

彼女は慌てて、僕を引き止める。何なんだこの女は。

礼なんて言つてるが、僕に恨みがあつて違う意味の礼がしたいとか? だつたら、こいつを消さないと自分の身が危ない…?

「僕に君の大切な誰かが殺されたのか?」

「そんな事、あなたにされていないよ。私は、あなたに助けられたの。だから、あと僅かな時間あなたに捧げたいと思ったの。あの時、あなたに助けられなかつたら今の私はいなかつた」
ますますわからなくなってきた。どう考へても、彼女に見覚えはない。

「…礼をするつて言つなら、君は僕に何をしてくれるんだ?」

「あなたが望む事なら何でもする」

馬鹿げている。この女、頭がおかしんじやないか?

「それじゃあ、もう僕に声をかけないでくれ」

僕はくるりと向きを変えて、再び歩き始めた。意外にも彼女はそれ以上、何かを言おうとはしなかった。

この世界に誰かの為に何かをしようなんて人間はいない。それは、僕も同じだ。生きる為に、強盗、窃盗、薬の運び屋、殺し…何でもやる。それが、僕の毎日だ。

第3話 サウ、エッヂ

しばらく歩くと、サウ、エッヂと呼ばれる僕らの集落がある。サウ、エッヂ（savage）とは、野蛮なという意味だ。街の人間は、僕らの事をそう呼ぶのだ。奴らにしてみれば薄汚い僕らなど、街を荒らす悪い害虫だ。

ガラクタの山の中に囮まれた集落は、個々が作った家がある。家と言つても、雨露をしのぐ程度の粗末なものだ。多くは、布の切れ端を集め、一本の支柱を立てた上にそれを被せて布を張る。そうすると、簡単なテントが出来るのだ。器用な奴なら、ガラクタを繋ぎ合わせたりして、家の形の物を作ってしまう。だが、あいにく僕にそんな器用さはなく、多くの中の一人だ。

「よう、クロ。今日は珍しく、べっぴんさん連れてるじゃねえか。おめえもなかなかやるなあ」

自分のテントへと入るといふとすると、近くに居を構える赤鼻の爺さんが言つた。

べっぴん？僕は後ろを振り向いた。サラサラな長い髪を風に揺らしながら、彼女は立っていた。

「望んだ事をしてくれるんじゃなかつたの？」

僕は怪訝そうな顔をし、佇む彼女に言つた。

「あんなの御礼をした事にはならないじゃない」

と、彼女は不満げに言つ。どうやら、厄介なものにとり憑かれたようだ。

僕は手探りで、テントの中に積んであった焚火用の薪を取り出し、マッチを擦つてそれに火をつけた。火は赤々と燃え出し、僕のテントを照らす。

そして、次にボロ布を取り出すと、生活用水場へと向かつた。集落のすぐ脇にある生活用水場は、雨水が貯まつた池だ。この場所は雨が降ると、ちょうど水が貯まりやすい条件に整つているのだ。僕は

ズボンの裾を捲くり上げ、上に着ていたシャツを脱いだ。池の中に入り、水を浴びる。水は冷たく、肌を刺す。

「こんな処まで着いて来てどうしようっていうんだ?しかも、人の水浴びなんかにまで」

今まで無視していた女に声をかけた。

第4話 「帰らない」

彼女は少し顔を赤らめ、「だつて、まさか水浴びするなんて思つてなかつたから。また私が逃げてしまうんじやないかつて思ったの」と、伏し目がちに言つた。

「名前」

「え?」

「名前なんて言つんだ?」

「ほたる」

「やつぱり、名前があるんだな」

僕は池から出て、ボロ布で体を拭き、シャツを着た。

「君は、街の人間だろ?」

「違うわよ」

「それじゃあ、何処から來たんだ?」

「小さな小川がある草むらから」

変な事を言つ奴だ。でも、月明かりに照らされた彼女の瞳は、嘘をついてるとは思えなかつた。

黒だと思つていた瞳は、ようく見ると青みがかつていた。不思議な魔力を持つた瞳。それは、彼女をより一層、現実ではないものにさせていた。

「帰る家があるなら、帰つた方がいい。君みたいな人が来る場所じゃないよ」

テントに戻りながら言つ。

「帰る気はないわ。言つたでしょ。あなたの為に私の時間を捧げるつて」「今日だけは許す」

と僕は言つて、一枚だけの毛布を彼女に投げつけた。僕はテントの中で彼女に背を向け、じろんと横になり、目を閉じた。どうせただの気まぐれ。こんな場所、普通の奴だったら居る事さえ

嫌だろう。明日の朝にでもなれば、気が変わって帰るだろう。

毛布を投げつけられた彼女は、それを持ったまましばらく僕の背中をじっと見ていた。そして寝ている僕に近づくと、そつと毛布をかけた。彼女はしゃがんだまま、僕の寝顔を見つめる。まだ眠りが浅い僕は、それに気づいていた。

うつとうしい。

自然に眉間にしわが寄った。目を開け、ギロッと彼女を睨みつける。すると彼女は、にこりと笑い返した。

第5話 名前

「人の寝顔を見て楽しいか?」

僕は不機嫌そうに、彼女に尋ねた。

「うん。人の寝顔って見るの初めてだから」

僕の不機嫌さとはよそに、彼女はにこにこしながら言つ。

「あつそ」

やつぱり変な奴だ。僕は彼女を相手にしない事に決め、無理矢理眠りについた。

朝になると、彼女の姿はなかつた。僕の予想は当たつたのだろう。昨日燃やしていた焚火は、まだ少しくすぶつていた。僕は薪を足し、火をつけ直した。朝は気温が異常に低く、寒さが身に染みる。

「クロツ！」

突然、彼女が元気よく目の前に現れた。少し驚いたが、

「帰つていなかつたのか?」

と僕は、焚火を小枝でいじくりながら言つ。

「帰らないよ。まだクロに御礼していないもん」

彼女は、僕の目の前にしゃがみ込む。

「昨日は、クロつて呼んでいなかつたよね」

「赤鼻さんに教えてもらつたの。クロつて名前、教えてくれなかつたじやない」

「名前つてわけじゃない」

僕は燃える火に目を向けたまま、呟くように言つた。

「知つてるよ。ここの人達は名前がなくて、呼び名なんですよ。赤

鼻さんは、鼻がいつも赤いから」

「それも赤鼻の爺さんに聞いたのか?」

「うん」

と、彼女はこつくりと頷く。

「クロは、自分の呼び名の由来知つてる?」

由来？考えた事はなかつた。

ここに来て初めて会つたのが、赤鼻の爺さん。僕を見るなり、クロ
と言つた。今まで小僧とかガキつて言われてたから、不思議な感じ
だつた。

赤鼻の爺さんが僕の事をそう呼ぶようになつて、ここにいるみんな
も同じように呼ぶようになつた。当たり前になつた僕の名。

第6話　由来

「知らない」

僕は顔を上げ、彼女を見た。彼女は何だか、嬉しそうだった。

「あのね、あのね、クロつていうのは、赤鼻さんが昔一緒にいた相棒の名前なんだって」

『よう、お前さんはクロにくついて来た嬢ちゃんじゃないか』
赤鼻の爺さんは、自分の処へ尋ねて来たほたるに声をかけた。

『クロつて、あの人人の名前?』

『なんだ嬢ちゃん、あいつの名前知らなかつたのか』

『うん、クロは私に教えてくれなかつたよ。私の事あんまり好きじやないみたいだね』と、しょげた彼女を見て赤鼻の爺さんは、

『まあ、名前つてほどのもんじゃねえからな。俺らは、戸籍ついてうもんもねえし、名前なんてもともとは持つてねえ。だから、みんなでお互いに呼び名つてもんをつけるのぞ』と笑つて言った。

『あなたの名前は?』

『赤鼻だよ。鼻がいつも赤いからな。これのおかげで』

赤鼻の爺さんはへへつと笑つて、懐から酒を入れる携帯用の平たいボトルを出した。

『クロの名前の由来は?』

『クロつてのはなあ……』

赤鼻の爺さんは、ボトルの蓋を開け、中の酒をぐびりと一口呑む。

『俺の昔の相棒の名前よ。クロは、野良のくせに色艶のいい毛並みの黒犬だつたんだ。あいつは突然現れて、それから何でか時々ここへ来るようになつたんだよ。犬つてえのは普通、群れを作つたりするんだが、他の犬とも戯れねえ変な犬で、人間嫌いでもあつたが、気が合つたのかいつの間にか俺の相棒になつてたよ』

『その黒犬から何で名前を取つたの?』

彼女は赤鼻の爺さんの話にじっと耳を傾け、興味津々な様子で聞いているので、赤鼻の爺さんは気分をよくしたのか、もう一口酒を呑むと続きを話しだした。

第7話 「独りじゃないよ」

『あいつは突然現れたが、俺の前から消えんのも突然だつた。あいつがいなくなつて何ヶ月か経つたんだ。そんなある日に、今のクロガやつて来たんだよ。艶のある真っ黒な黒髪に、ガラス玉みたいな真っ黒な眼。何だか、クロが戻つてきたっていう錯覚を起こしちまつたんだ』

赤鼻の爺さんは、へへつと笑つた。

『あいつ、性格もなあ、クロに似てんのよ。人間嫌いで、自分しか信じねえし、それでいて一人で淋しい、悲しい眼をしてんだ』

『クロは、寂しいのかな?』

『さあな』

赤鼻の爺さんは、酒を口に運んだ。

「黒犬の名前か…」

普通の人間なら、犬の名前をつけられたら嫌な気分だろ?。だが、僕にはそう嫌な気はしなかつた。

それは、黒犬が赤鼻の爺さんの相棒という事だつたからだろうか。それとも、僕が名前なんてもの的重要性を感じてはいないからなのか。

「クロは、独りで寂しい?」

彼女の瞳が僕を捕えた。

彼女の瞳を見ると、嘘をつく氣にはなれない。いや、嘘をつけない。

「…わからない。気付いたらずつと独りだつたから

「大丈夫、クロは独りじゃないよ」

胸に不思議な感覚を覚えた。彼女の透き通つた声が、すうっと胸の中へと入り込み、ふわっと優しく広がつた。

それは、初めての体験だった。きっとこの時、僕の中に彼女の居場

所ができたのだろう。

「独りじゃないって？」

「私がクロの傍にいる

彼女の身勝手さは、僕の中で跟つていて何かを揺らす。

「どういう事？」

と尋ねたが、彼女の性格を少しずつわかつてきた僕は、何となく答えがわかつていた。

「クロと一緒にここで暮らすの」

「僕の意見は聞かないの？」

「クロは、私が傍にいるのは嫌？」

第8話 一 緒

彼女はちらりと不安げな表情を見せた。

なるべく人を遠ざけてきた自分が、ほたると暮らす。想像がつかなかつた。でも、何故かこの強引な展開を自然に受け入れてしまった。

僕は彼女に惹かれているのだろうか？

「タダでは住まわせない。自分の飯とかは、自分で調達する事。だけど、住まわせるのはずっとわけじゃないからな。ほたるが家に帰りたくなるまでだからな」

「本当！？いいの？」

彼女は素直に喜び、満面の笑みを見せた。

「ああ、どうせ帰れって言つたつて、帰らないだろ？仕方なしにだ」「まずは何をすればいいかな？」

彼女は、顔を緩ませたまま言った。

「…金の調達じゃない？この世は全て金で成り立つてゐる。仕事を探すといいんじやないかな？僕の場合はまともな仕事はできないけど、君なら何か見つかるんじやない？」

自分でもちょっと無責任な言い方だと思つたが、この世界には保証なんてものはない。絶対なんて事はありえない。だから、こいつ言つしか僕にはできなかつた。

「じゃあ、お仕事探そう」

彼女はそう言つと、僕の腕を掴んだ。

「え？」

僕は彼女に引つ張られながら、集落を出て、街へとやつて來た。

「ちょ、ちょっと待つてよ。何で僕まで君と一緒に。まさか、仕事探しを手伝えて言つんじやないだろうね

「私、街の事よくわからないの。教えてよ

礼どころか、借りを作つてどうするんだ。

街に来ると、どうしようもなく吐き気がする。昼夜を問わず欲望

の塊が街を埋め尽くし、何処かにその掃きだめを探し、さ迷つてい
る。自分もその中の一員だと思いながらも、認めたくなかった。

第9話 アネゴ

「あの、お仕事貰えません?」

彼女は、一人の女に声をかけた。無知とは、恐ろしいものだ。

「ん? お嬢ちゃん、仕事が欲しいのかい? どれ?」

束ねた栗色の髪は崩れ、ボサボサの頭。光りのない茶色の瞳には、希望という名のものは決して映し出されないだろう。

露出度の高いドレスからは、歳の割りには白く透き通った肌が故意的に出され、男達を誘っていた。

「そうねえ…アンタなら、いい金で売れそうだねえ」

女は彼女の顎を掴み、いろんな角度から彼女の顔を眺めている。

「アネゴ、悪いがこいつにこの仕事をさせるわけにはいかないんだ」

「何だいクロ、アンタ居たのかい」

アネゴは彼女から手を離し、僕の方へと目を向けた。

「この娘、アンタのかい?」

「今のことのはね」

アネゴという人は、体を売る女達を自分のもとへ雇い、取り仕切る立場の人だ。

彼女のもとに付けば、一人でやるよりも確実に客を取れるし、アネゴの力は絶大だ。

いろいろとコネもあって、金を払わないで逃げられる事もない。逃げようものなら、もちろん命はない。

そんなアネゴのところに客は来るのかと疑問に思うだろうが、彼女は売れる女しか取り揃えない。彼女はその世界でのやり手なのだ。

「アンタの娘なら、仕方ないね」

とアネゴは少し、不機嫌そうな顔をした。

仕事を探せとは言つたが、流石にこういった類いの仕事はさせられない。「こいつは、僕らの世界をわからないんだ」

「ふん、そんな何処ぞのお嬢様か何かもよくわからない娘とよく一

緒に居られるもんだわ。まあ、アンタも所詮男だつて事だね
アネ、コは一度不機嫌になると、なかなか直りにくい。

第10話 花屋

「僕らはもう行くよ。すまなかつた」

僕がその場から逃げるようにアネゴの横を通り過ぎようとするが、アネゴは僕の腕を掴んだ。

「アンタ、磨けばいい男だと思つのよね。今は、男だつて売れんのよ。どう?」

「悪いけど、それだけは止めんだよ」

「あら、意外と純なのねえ」

と、アネゴはクスリと笑うと、手を離した。

「冗談よ。でも、磨けばお金になるのは本当よ。アタシの田に狂いはないわ」

去っていく僕の後ろ姿に、アネゴは僕に聞こえるように声を張り上げて言つた。

「ねえ…」

ほたるは、進み歩く僕の顔を覗いた。彼女が言いたい事はわかつていた。

「アネゴがやつている仕事は、君にさせられないよ。どうこう仕事かなんて、わからなくていい。それよりも、他を探そう」
僕はそう言つて、先を歩いた。すると、彼女は後ろから「きなり僕の腕に飛び付き、自分の腕を絡ませてきた。

「うん!」

彼女は何故だか嬉しそうに、頷いた。

彼女が離さないので、僕はそのまま彼女と腕を組んで街を歩いた。
腕を離そうと思えば離せただろう。だけどそうしなかったのは、離したくなかったからかもしれない。

「あ!」

彼女の目に何か止まつたらしく、僕から腕を外すと少し先の店へと駆けて行つた。

彼女のもとへと行くと、彼女は店の花を眺めていた。今まで花なん
てものを気にして見た事がなかつた。花なんてものは、金のある奴
らがお飾りで買つものだ。

「きれいだね」

彼女は眼を輝かせていた。

「そう？」

花つてもんの何処がいいんだ？ただの雑草と同じだろ。

「いらっしゃい」

腹がでつぱりと出た体格のいい花屋の店主が僕らに声をかけた。

第1-1話 店主の妻

「あのう、仕事貰えません?」

彼女の唐突さに店主は皿を点にしてしまっての聞言葉を口にできなかつた。

「…ここで働きたいの?」

「はい」

彼女は、口づくと頷いた。

「あんた、何やってんだい!」「

店主に負けてない身体の持ち主の女が現れた。

「いや…あの…」

店主は口ごもり、妻の顔色を見ている。

「ん? 何だい。お客さんじやないか。しつかりしとくれよー。」これは

私の店じやなくて、あんたの店なんだからねー!」

僕らに気付いた店主の妻は、店主に口づけながら言つてこる。

「いや…客じやないんだ」

「客じやないつて! ?」

妻がヒステリックな声を上げ、店主はどうにも縮まらないその身体を小さくしながら、ビクッと肉の塊を揺らした。

「冷やかしかい?!」

店主の妻は、小さな皿を吊り上げて僕らを睨んだ。

「いや…それも違…」

「あ? 何だいあんたー! もー! もー! 嘶つてないで、はつきり喋つたらどうだい! ? ジれつたい人だねえ! !」

口ごもる夫に妻は、怒鳴りつけるように苛々した様子で言つ。

「私、ここで働きたいんです。お仕事貰えませんか?」

ほたるは、夫に助け舟を出した。夫の顔と強張っていた身体は緩み、だらし無い身体はさらにだらし無く緩んだ。

「ふうーん、あんたウチで働きたいの」

店主の妻は彼女を注意深く眺めながら、彼女の周りをぐるりと回った。そして顎に手を当て、考え込んだ。

「このご時世、花を買っていく人なんか滅多にいなくてね、ウチは破綻寸前なのよ。本当は、人を雇う程の余裕なんてないんだけど…」
店主の妻の小さな唇がさつきとは違つてゆつくりと、ぶつきらりまつ
な感じだがそれでいて、優しく言葉を放っていく。

第1-2話 変化

「仕事探してるなんて、よっぽど困ってんだろ。普通、自分達がこんな状況じゃ情けなんてかけないんだけど、あんた顔良いし、良い宣伝になりそうだからね。いいよ。ウチで働きな」

「わあ！ ありがとうございます！ 嬉しい

意外にも上手く行ったものだ。

店主の妻がこの街では珍しい優しさというものをただ持つていただけではなく、それを引き出したのは彼女の持つ光の力なんだと、僕は不思議と自然にそんな事を思っていた。

きっと真似をしようとしても、僕にはできない事だろう。僕には、彼女の持つ光がないのだから…

「クロ、ありがとう」

集落に帰る途中、彼女は僕に微笑みかけた。胸の中に暖かいものがふわりと入り込んだ。

「ありがとう？」

「お仕事見つかったのは、クロが付き合ってくれたおかげだから」

「そうかな？」

「そうだよ」

彼女は組んでいた僕の腕にぎゅっとしがみついた。

彼女と一緒に居て、僕の何かが変わつて行く気がした。それが心地良い気がして。でも…それが恐くもあった…。

このまま僕はどうなつてしまふんだろう？

「それじゃあ、頼んだぞ」

ぱりつとした上等なスーツを着こなした男は、僕にそり言つとその場を去つて行つた。

僕は、男から受け取つた旧式の銃を眺めた。

自動式の小型銃。今は弾丸のものは手に入る事はないが、殺しを依頼してくる奴らなら、金を持っている。金があれば何でも手に入る。僕は試しに、銃を構える。3メートルくらい離れた処にちょうど空き缶が転がっていた。

僕は片手をつぶり、照準を合わせる。銃のハンマーを力チャリと下ろす。引き金を引こうとした時、

「よひ、クロ」

と、赤鼻の爺さんがやつて來た。

「どうしたの？」

僕は銃を下ろし、赤鼻の爺さんの方へ顔を向ける。赤鼻の爺さんが僕の処へ来るなんて珍しい。

「ん？いや、特別用があるって訳じゃねえんだ。おめえ、それ、殺しの依頼か？」

赤鼻の爺さんは、手に持つている銃に目線を向けた。

「そうだよ」

「俺はな、おめえに説教垂れるつもりはねえんだが……」

赤鼻の爺さんは、懐からいつもの酒の携帯用ボトルを出す。

「人が殺す事がいけねえとかそんな事は言わねえ。俺らは汚ねえ事してかなきや生きていけねえんだ。そんな世界を作ったのは、街の奴らだ。俺らに殺られんのも、自業自得ってやつだ。だけどな……」

赤鼻の爺さんは、酒をぐびりぐびりと喉に通す。

「自分で殺すなよ……」

ここで普通なら酔っ払いのたわ言だと聞き流すのだが、僕を見据える赤鼻の爺さんの眼には力があった。

「俺の相棒のクロはな、姿を消してから何週間もした時にそいつの噂が流れてきたのよ。あいつ…死んじまつたんだ。人間に襲い掛かつて、側にいた奴に撃ち殺されちまつたんだそうだ」

赤鼻の爺さんは酒のボトルをじっと見つめる。どことなく悲しそうな眼が銀色のボトルに映し出されていた。

「…クロは利口な奴だ。人間を襲うなんて事は普通はしねえ。何があいつに起きたんだろうな……」

赤鼻の爺さんは、自分の気持ちを流し込むようにぐいっと酒を呑む。

「ただ確かなのは…あいつは自分が犬つて事を忘れちまつたって事だ」

赤鼻の爺さんはそれだけ言うと、フラフラとしたおぼつかない足取

りで去つて行つた。

自分を殺す…。僕には、理解ができなかつた。

僕は銃を再び構え直し、空き缶を撃つた。

パン！！

第14話　温度

穴が開き、空き缶はクルクルと宙を舞う。

「カラーン、カラーン」という空虚な音を立てて地面に転げ落ちた。

「クロ！！」

しばらく空き缶を見つめていた僕の前に、笑顔のほたるが顔を出して来た。

「仕事、終わったの？」

「うん！ねえ、見てこれ！！」

彼女は、小さな植木を見せた。植木には、釣り鐘のように頭を垂れた白い花が咲いていた。

「これ、花屋のおじさんに貰ったの。古代種を復活させてるんだって。この花の名前、ホタルブクロっていうんだよ」

彼女は目を輝かせながら、僕に話す。

「気前がいいね」

「お仕事頑張ってるからだつて。でね、ほたるつて名前だからってくれたんだよ」

彼女は僕なんかより、生きるのが器用だ。何だか、彼女が恨めしく思った。

「？」

彼女はいきなり黙り込むと、僕の顔をじっと見つめた。

「クロ、何か元氣ないね」

彼女はそつと僕の頬に手を触れた。彼女の手は、温かかった。人の手って、こんなにも温かいものなのか…。

僕は無意識に、頬を触れる彼女の手に自分の手を重ね合わせていた。僕は目を閉じて、彼女を感じる。

「ほたるつて不思議だね」

そう言つた僕はまだ目を閉じていたが、彼女が優しく微笑んだ気がした。

力チャリ

静かに銃のハンマーを下ろし、ビルから出て来るターゲットに狙いをつける。今回のターゲットは、いかにも悪人面のおっさんだ。そのおっさんには、ボディガードが3人。高級車に乗り込もうとしていた。

僕は、現代の銃を使わない。

現代の物は正確に狙う為に、超音波認知やら、殺傷力の高い高熱レーザーなどが付いている。

だが、科学はあまりにも進歩し過ぎた。良かれと思った技術は、逆に他の技術を妨げるのだ。

第15話 異変

現代の銃は、あらゆる機器から出る電磁波によって、たまに誤作動を起こすのだ。

そんなのが、暗殺に適しているわけがない。だから僕は、旧式型を使うようにしているのだ。

これも生きる為に得た知識だ。

引き金を躊躇いもなく、ターゲットの頭に向けて引いた。

パン

いつものように、うまくいった。

ボディガード達は慌てて、辺りを見回す。僕は銃を懐にしまい、何食わぬ顔で表へと出る。

「畜生！…誰だ…！」

「何処から

ボディガード達は騒いでいるが、何かそれ以上の事をする様子はなかつた。

この街で殺しなんてのは、日常茶飯事。野次馬もたいしてはいない。僕は数人の野次馬の中へと入って、ターゲットの死体を眺めた。男の後頭部から流れ出る赤黒い血が地面を染めていた。

しばらくすると他の車がやって来て男の死体を車に乗せ、ボディガード達も死んだ男の車に乗り込むと、その場を去つて行つた。

後に残つたのは、ここで一人の男が死んだという証。

野次馬が皆掃けた後、僕はしゃがみ込み、男が流した血に手を觸れた。それは、生暖かかった。

今さつきまで、男の体内に流れていたという事を証明していた。

この時、僕の頭にほたるの温かかった手が蘇り、赤鼻の爺さんの言葉が脳を揺らした。急に目の前がぐるんと回り、目眩がした。

何でそんなものが繋がったのかわからない。

僕は頭を振り、立ち上がる。

何度も何度も繰り返される赤鼻の爺さんの言葉、男の死体、生暖かい血。それらを振り払いながら、集落へと戻った。そして真っ先に、生活用水場へと行き、血がついた手を洗った。ゴシゴシと洗う。綺麗に落ちた両手を見つめる。その手は、小刻みに震えていた。

第16話 好きだから

僕は今までとは違つ何かに怯えていた。僕は青ざめた顔で、自分の場所へと戻った。

「お帰り」

と、ほたるは僕を笑顔で迎えた。
僕に光の粒が降りかかる。

初めて会つた時には恐ろしく思えた光なのに、僕はその光にしがみつくように彼女を抱きしめた。

彼女の体は小さくて、僕が強く抱きしめると壊れてしまいそうな気がした。でも彼女は、僕を強く抱きしめ返してくれた。

彼女は囁くように言った。

「大丈夫だよ。クロ」

彼女は、僕の事を何でも見透かしているようだった。

彼女の光が僕へと差し込み、僕の闇を壊す。優しく、ささやかな光で…。

僕達は、一緒にいる事が当たり前になつた。
それがいけなかつた。

僕の中には今でない不安ができた。

彼女がいなくなる事に耐えられない自分がいた。

彼女無しでは生きていけない。

今まで独りで生きてきた僕にとって、それは恐ろしい事だった。

彼女がいなくなつたら、自分が壊れてしまうんじゃないかという不安が僕に押し寄せる。

彼女を想えば想うほど愛しく感じて、それでいて不安は僕の心を締め付ける。時々苦しくて、彼女をまともに見れなくなる。だけど、

そんな事を知らない彼女は、いつも僕に溢れ出る光を降り注ぎ続けてくれる。

僕はいつしか、そんな彼女と距離を置くようになった。

「最近、嬢ちゃんと一緒に居ねえなあ。それに、ここにもあんまり帰つて来てねえみたいじゃねえか」

赤鼻の爺さんは、相変わらず酒臭い息を吐きながら、久しぶりに集落へと帰つて来た僕に話しかけてきた。

「そりかな？」

僕は、素つ気なく答えた。

第17話 突然は必然に

「嬢ちゃん、お前がいないと寂しそうだぞ」

「そう」

寂しそうにする彼女の姿が浮かび、キュッと僕の胸を締め付けた。

「何でか知らねえが、避けてんのは可哀相だぞ」

わかつて。だって、こんなにも胸が痛い。

「大切なもんは、失くなつた時にはもう取り戻せねえよ」

苦しさから逃れる為に、彼女から離れたのに、余計に苦しくて、痛い。

僕は、どうしたらいいのかわからなかつた。

闇は、光を恐れた。光は闇を打ち消すから。

でも、光は闇が思つてゐる程、強くはなかつた。それどころかもろかつた。

闇はその事実に気づかなかつた。光を求めていながらも、それから逃れようと背を向けたから。

僕は

「は？」

とし、頭を持ち上げた。

「おい、どうしたんだ？」

一緒に薬を運んでいた一人が、僕に声をかけた。

「…行かなきや」

僕は呟いた。

「は？」

声をかけた男は、僕の顔を訝しげに覗く。

「呼んでる」

僕はそう言つと、走り出した。

「おい！ちょっと待てよーー！」

僕を呼び止める男の声は、僕の耳に届いていなかつた。ほたるがいなくなる。

今、逢いに行かないと、一度と逢えなくなる気がした。僕は無我夢中で、街中を駆け抜けて行き、彼女の居る集落へと向かう。

「ほたるーー！」

彼女は地面に膝をつき、両手で顔を覆つっていた。

息を切らしてやつて来た僕を彼女は見上げた。彼女は、大粒の涙を流していた。

「…ほたる？」

僕はそつと、彼女の肩に手をかけ、それと同時に驚いた。彼女の体は、透けていた。

「クロ…クロ…」

彼女は僕に助けを求めるかのように、僕にしがみついた。

「ほたる、これは…」

第18話 別れ

僕は目の前で起きている出来事が信じられないまま、彼女の肩を抱いた。

「お別れが来たの…。ずっと…ずっと、一緒に居たかったのに…」

彼女の肩は震えていた。

「ここまででは、神様に許してもらえなかつたんだね」「ほたる、僕には意味がわからぬよ」

僕が恐れていた事が、今、現実になろうとしている。

彼女の肩を抱く僕の手も震え、それを止めようと自然に力が入る。

「クロ。私、クロの事大好き。私はいつでもクロの傍に居るから、クロも私の傍に居てね」

彼女は、僕の唇に軽くキスをした。

…ぱたり。

自然と僕の目から涙が零れ落ちた。

彼女の体が徐々に消えていく。行かないでくれと、僕は必死に彼女を抱きしめた。

でも…

僕に止める力はなかつた。

僕は声にならない声で泣いた。とめどもなく溢れ出る涙を抑えようもなく、ひたすら泣き続けた。

こんなに泣いたのは、初めてだった。きっと、最初で最後の事だろう。

僕は、自分を殺した。

彼女への気持ちを恐れるあまり、偽りのない気持ちを隠し、捨てさ

ろうとしたのだ。

犬のクロは自分を犬だと言う事を忘れたように、僕は自分を人間だ
という事を忘れていた。

人間の持つ感情を恐れ、否定した。

それは自然な事なのに。

普通な事なのに。

後悔してももう、何も戻らない。

あの後、彼女が大切にしていた古代種、ホタルブクロの植木に小
さな虫の死骸が入っていた。僕はその虫を見て、全てを悟った。
僕はそのホタルブクロを持って、彼女の家へと向かった。

『小さな小川のある草むらから』

ここは珍しく、透き通った水が流れていた。小川とは呼べない程の
頼りない流れの水。だけど、それは力強く精一杯流れていた。

僕はその近くに、虫の亡きがらとホタルブクロを植えた。

「ありがとう、ほたる」

第19話 蛍

窃盗と一緒に働いた仲間の一人と、草むらへと逃げ込んだ。

『ハアハア……もう、ここまででは追つて来ねえだろ』

一緒に逃げてきた男は、汗を拭う。

『そうだな』

僕は注意深く辺りを見回しながら、答える。

『あれは……？』

僕は、草むらに潜む小さな明かりを見つけた。

『こりゃあ、もしかして……』

男はその明かりに心辺りがあるらしく、そおっとそれに近づくと、両手に包み込んだ。

『おい、その辺に瓶がなんか落ちてないか？』

僕は、暗闇の中を目をこらして見た。すると、足に何かがぶつかり、「カン」という音がした。

僕はそれを拾い上げた。それは、透き通った空き瓶だった。

男はその空き瓶に、両手に包んだ物を慎重に中に入れれる。そしてすぐには、瓶の口に手で蓋をした。

瓶の中では、黒い虫が光を放ちながら舞っていた。

『珍しいなあ。これ、絶滅したとかいう虫だぜ』

男は、笑つて言つ。

『それ、何だ？』

僕には初めて見る虫だった。

『確かに、蛍つていうんだ。これ、金になるぞ』

『蛍……』

僕は、じつと蛍という虫を見つめた。

蛍は瓶の中から出ようと必死で飛び回っていたが、光は弱々しくなり始めた。

『逃がしてやれよ』

『はあつ！？』

男は僕の言葉に、信じられないという顔する。

『こんな珍しいもん、ぜってえ大金積まるるんだぞーー』

『逃がせ』

僕はたまたま持っていた銃を男のこめかみに向ける。

『おい、おい、そんな物騒なもん向けんなつて。なあ、お前にも分け前やるからさ』

男は銃の代わりに、引き攣つた笑みを僕に向ける。

『早く』

僕はそういつづつと、銃のハンマーを下ろした。

『わ、わ、わかった！？お前には敵わねえよ』

男は慌てて、瓶の口から手を離す。蛍はそこから勢いよく、飛び立つ。

『あーあ、何で逃がしちまうかなあ。ああ、俺の金え』

男は情けない声を出し、蛍が飛び立った夜空へと手を伸ばす。

『ただの気まぐれだよ。普通の奴らが言う、善い事つていうのをしてみただけだよ。……一生に一度してみただけ』

僕は、夜空に煌めく星に負けないくらいに光る蛍に憧れた。僕にもあんな生き方ができたらと、柄にもなくその時一瞬、淡い夢を見た。

END

第19話 蛍（後書き）

読んで頂き誠にありがとうございました。

サイドストーリーとして、「雨音～クロの真実～」（短編・その他）があります。よろしければこちらの方も合わせてご拝読頂くとより良いと思います。この作品を気に入つて頂いた方は、是非ともよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7070a/>

萤影

2010年10月28日08時27分発行